鈴木 理恵子　　*SUZUKI Rieko*

≪書評≫

岩上はる子、惣谷美智子編著

『ブロンテ姉妹と 15 人の男たちの肖像　作家をめぐる人間ドラマ』（ミネルヴァ書房、2015 年）

Buronte shimai to jūgo no otokotachi no shōzō: sakka o meguru ningen dorama (The Brontë Sisters and the Fifteen Men: Influences, Publishers, Critics, and Characters). Edited by Iwagami Haruko and Sōya Michiko. Minerva Shobō, 2015.

本書は、1990 年代に盛んであったポスト構造主義後いわば反動としておきた新たな文学批評の流れに位置づけられている。それは、編者の言葉を借りれば、「読者として作品を読みふける素朴な読書体験の根底にある人間への興味、物語性への希求」であり、それらの欲求を満たしてくれる内容となっている。本著は、二部構成からなり、前半は、「姉妹を取りまく男たち」、そして、後半は、「作品に息づく男たち」である。

芸術家を「天才」として単独に扱うのではなく、彼らを取り巻く人間関係に着目し、ネットワーク理論を駆使した批評が最近見られることから言うと、本著はタイムリーである。従来「天才」として仰がれた作家達は、決して単独でそのような芸術の域に達したのではなく、周りの人々の影響や手助けもあって「天才」と称されるまでになったケースが多く、ブロンテ姉妹についても同様な事がいえよう。その中でも、父親の影響が多大なものであることが、第一章にて立証されている。また、同年代または後世の文人達によって、ある固定されたイメージが特定の作家に出来上がってしまうのは、よくあることだが、ギャスケル夫人が築き上げたシャーロット・ブロンテ像をクリテ

ィカルに検証している点で注目に値する。第二章において扱われている、ブロンテ姉妹の唯一の男性兄弟であるブランウェルは、単なる敗北者ということだけでなく、いかにブロンテ姉妹の想像世界に影響を及ぼしたか、また、彼女等の作家としてのアイデンティティ形成に助力したか、彼の存在意義を改めて分析している点において評価できる。シャーロット・ブロンテの恋の相手のエジェに関する章（木村晶子氏筆）は、正に彼女の作品の背後に潜む人物として、読者の関心が集まるところであるが、その好奇心を満たすのみならず、公正なエジェ像を描出しているといえよう。また、シャーロット・ブロンテが交渉にあたった出版社主のジョージ・スミスとの関係も、彼女の作品においては、重要な位置を占めており、シャーロットがあくまでも彼とビジネス関係を貫いたことが作品にどのように投影されているかという解釈も面白い。シャーロットが実際結婚するに至ったニコルズに関する章は、伝記的要素を多分に含み、物語性が高いものになっている。シャーロットの G. H. ルイスとのやり取りは彼女の作家としての顔が垣間みられ、ヴィクトリア朝における女性作家が置かれていた立場を浮き彫りにしている。実人生に纏わる影響関係とは別に、創作上の影響関係に着目しているのが、前半最後の章である。シャーロットとサッカレーが各々の作品に織りなす綾を解く過程において、お互いの作品を意識していることを扱った論考は、小説の創作過程が如何に複雑なものであるかということを示している。

後半部分では、専ら作品内における男の語り手なり登場人物に着目しているが、最初の章では、シャーロットの習作過程において、如何に虚構世界と現実世界の関係が変化していったかということが、語り手チャールズを通して論じられている。シャーロットの円熟した作品に至る道筋が見えてくる点において、興味深い。『ジェイン・エア』のローチェスターに着目した章は読者にお馴染みの人物を異なる「視点」という観点から論じており、新たな見方を提供するばかりでなく、本作品の魅力自体に迫るものである。同じく『ジェイン・エア』の登場人物であるシン・ジョンに関する論考は、ジェンダーと帝国との関係か

ら本作品を社会的・政治的コンテクストに位置付けたものである。次の三章は、エミリ・ブロンテの『嵐が丘』に登場する男性人物を扱っている。ヒースクリフ、エドガー・リントン、ヒンドリー・アーンショー共、従来の解釈に挑戦すべく、新たな視点を駆使した人物像を浮かび上がらせている。『嵐が丘』の様な古典作品について、オリジナリティを出すことは、容易ではないが、どの章もその意味では、新しい要素というものを小説に与えている。『ジェイン・エア』のローチェスターと『嵐が丘』のヒースクリフを持ち出し、第三のヒーロー像を描いたのがシャーロット・ブロンテの『ヴィレット』のポール・エマニュエルである。最後の章では、初めて、アン・ブロンテの作品が取り上げられており、『ワイルドフェル館の住人』のアーサー・ハンティンドンに着目することで、如何に彼が当時一般的な紳士階級を代表するような男性であったかということが示されている。それはまた、ヴィクトリア朝社会を超えて男性中心社会を批判する作者の声とも聞こえる点が興味深い。

全体を通し、テキストの精読と歴史的・社会的コンテクストのもとにテキストを読んでいく手法は、正に歴史主義の産物であると言えよう。ジェンダーに関する論考も見え、文学が持つ、社会的・政治的インパクトについても考えさせられる。二部構成によって、ブロンテ姉妹の専門家でなくても十分理解できるように、前半部分の内容が後半部分の論考に活かされている。唯一バランスという意味で、シャーロット・ブロンテが本著の中心に置かれ、エミリ、また、特にアンの影が薄いように思われた。ブロンテ姉妹研究者には勿論のこと、専門家でなくても十分堪能できる内容になっている。